

附属学校教育局プロジェクト研究「交流・共同学習」の紹介 —附属坂戸高校と附属久里浜特別支援学校のインターネットを介した交流—

附属学校教育局 講師 菅野和恵

この研究は、筑波大学に11ある附属学校（間）における交流及び共同学習について研究するもので、これまでいろいろな視点からアプローチがなされてきました。私は、このプロジェクトに昨年度から参加し、附属坂戸高校と附属久里浜特別支援学校の交流活動の研究に関わりました。

この研究は、難問、というか超えなければいけないハードルが二つありました。まず一つは、坂戸高校は埼玉県、久里浜特別支援学校は神奈川県と、電車を使ったら移動に3時間程度かかるくらい離れているということです。ここまで距離が離れていると、日常的、継続的に交流を行うのは難しいのですが、この課題に対しては、スカイプのビデオ通話（インターネット）を用いて、児童生徒は移動せずに、テレビ画面を通じて交流することで対応することにしました。

二つ目は、コミュニケーションをとることに工夫や配慮が必要であるということです。障害のある児童生徒さんと交流する場合は、当然のことながらそれぞれの障害に応じてコミュニケーションの手段を考える必要があります。久里浜特別支援学校は知的障害のある自閉症のお子さんのための特別支援学校ですので、自閉症のお子さん方にも理解してもらえるようなコミュニケーションの取り方をしていかななくてはなりません。しかも、直接的に対面して交流するのではなくテレビ画面を通じた交流においても通じるようなやり方が求められます。この課題に対しては、簡単に解決策がでてくるわけではありません。また、こうしたらいい、といった処方箋のようなものがあるわけでもないのです。それぞれの学校の先生は、「企画書」といったいわゆる交流計画書を、メールで何度も連絡をとりながら、書き上げました。また、実際にスカイプのビデオ通話を使って打ちあわせをしたり、情報をファックスで流しあったりしながら、綿密に事前準備をされていました。

超えなければいけないハードルと書きましたが、実は、このハードルをどのように解決しようとしたのかという解決過程、そして、練りに練った交流の計画および内容が、この研究の成果になります。昨年度は3学期に試行的に実施し、今年度が本格実施になります。年度末には交流及び共同学習における実践例の一つを紹介できるようにすすめていきたいと思ひます。



附属今 附属駒場中・高等学校

附属駒場中学校 副校長 濱本悟志

新年度が発足して早一カ月半、教室のあちこちから歌声が聞こえ始めました。行事の多い本校では、まず5月の校外学習と6月の音楽祭（男声合唱）で、学年や学級の結束が試されます。さらに新入生は、由緒ある「ケルネル田圃」で稲作実習の洗練を受けます。

本校は、戦後間もない1947年に東京農業専門学校の附属として開校。その由来は、国立大学附属唯一の男子校であることや稲作実習からも伺えます。その後、東京教育大学さらに筑波大学の傘下に入り、愛称も「農教（ノウキョウ）」「教駒（キョウコマ）」「筑駒（ツクコマ）」と変化していきました。1996年には半世紀の教育活動を振り返り、本校の特徴を「自由・闊達の校風のもとに、『挑戦し、創造し、貢献する』生き方をめざす」という学校目標で表現しました。生き方を学ぶためには、多くの「学びの場」が必要です。この観点から、本校では「学業」「学校行事」「部活動」を学校生活の三本柱と位置づけています。特に「学校行事」は、2学期以降も体育祭、芸術鑑賞会、文化祭、ロードレース、弁論大会と続き、生徒たちは常に複数の行事に取り組んでいる状態です。

ここで、行事における本校の特色を2つほど紹介します。1つは、多くの行事で生徒が組織する実行委員会に企画と運営が委ねられ、そのもとで各学級が長期間にわたって取り組む方法が定着している点です。その過程で生じる葛藤、論議、打開、総括は今後の生き方に大きな影響を与えていくはず。もう1つは、高校3年生の存在です。「行事において、最高学年の高3は全生徒の模範たれ」。彼らは、他学年の数倍の知恵と労力と時間を割き、圧倒的なパフォーマンスを示すことを自らに課しています。その姿には、受験生の甘えなど微塵もなく、「これぞ筑駒生」を感じます。

今年も11月1～3日に、本校の最大行事である文化祭が開催されます。よろしければ、筑駒の行事の一端をご覧ください。



文化祭入会式上での高3パフォーマンス



体育祭を戦い終えた高3

附属今

温故知新

子どもに学ぶ（児童中心）

附属久里浜特別支援学校 教諭 浜津平一

本校は昭和48年（1973年）9月29日に、重度・重複障害児を対象とした国立久里浜養護学校として創立されました。当時、盲学校や聾学校とは違って、養護学校教育の義務制は完全実施とはなっていませんでした。ほとんどの重度・重複障害児は、就学猶予、就学免除という名のもとで教育の機会が狭められていました。本校は、隣接する国立特殊教育総合研究所との相互協力の下で、いわば未開の分野であった重度・重複障害児の教育にチャレンジすることになりました。そして数年後の昭和54年（1979年）に、本校での実績が大きな弾みとなって、養護学校教育の義務制が全国的に完全実施されることになりました。初代校長の藤原正人先生は、創立5周年記念誌に「児童中心」が学校運営の基本指針のひとつであったことを記し、「…このようにして私は、じっくりと腰を据えて子どもと接し、教育の対象たる子どもの側から直接に教えられることを知ったのである。今ようやくにして…具体的な方法が見えはじめた。」と述懐しています。



昭和54年度入学式

既存の教育内容、教育方法がそのままではならず、手探りの教育の中で指導書に代わるものとなったのが、子ども自身だったのです。当然の帰結として、教育の内容、方法は一人一人の子どもごとに作成されることになりました。つまり個別の指導計画がここに始まったのです。今こそ個別の指導計画は特別支援教育においては常識となっていますが、教育＝一斉指導が当たり前であった当時においては、他に類例を見ないものでした。

折しもアメリカにおいては全障害児教育法（PL94-142）が1975年に制定されました。その中心理念が有名なIEP（Individualized Education Program）です。もちろんアメリカのIEPは、成り立ちの経緯も制度的な意味合いも本校の個別の指導計画と同じではありませんが、それでも障害児一人一人に個別に指導計画を作成するという最も肝心な部分は共通です。洋の東西で、互いに無関係でありながら、同時期に、同じような発展があったことに驚きます。

本校は平成16年（2004年）に知的障害を伴う自閉症児の教育に特化し、筑波大学附属久里浜養護学校（現在は特別支援学校）となりましたが、「子どもに学ぶ（児童中心）」は今も変わらず、本校運営の基本指針となっています。

平成21年度小学部入学式

新任教員奮闘中

「桐が丘で新しい人生のスタートを切って」

附属桐が丘特別支援学校 教諭 中泉 康



私は、昨年度の3月31日にさいたま市立日進北小学校を退職し、今年度4月1日に桐が丘特別支援学校に異動しました。

私は、さいたま市で20年間、普通学校での教員生活を送ってきました。

私が、特別支援教育の道を志したきっかけは、2つあります。1つ目は、さいたま市立養護学校で教頭を勤められた経験のある先生との出会いでした。私は、折にふれて特別支援学校での教育について詳しく伺い、特に、「特別支援教育は、あらゆる教育の基礎の基礎である。」というお話に深く感動しました。

2つ目は、私が、担任した学級に知的障害をもったお子さんがいて、指導に苦労したことがあったからです。先輩の先生方やコーディネーターの先生に相談し、いろいろな工夫をしたのですが、教えたことがなかなか定着せず、どうしたら障害をもった子を本当に成長させることができるのだろう、と常に悩んでいました。

この2つのことをきっかけにして、是非、特別支援教育の現場に出て実践を積みたくて決心しました。そして、特別支援学校教諭2種免許状を取るために講習会を受け続け

ました。また、いろいろなセミナーに参加して勉強を続けていました。

そんな時に、昨年、桐が丘特別支援学校の「自立活動実践セミナー」を知り、参加することが出来ました。セミナーの全てが感動の連続だったのですが、特に、校長の講義を聴いて、「ここにこそ、私が探し求めていた、本当の教育がある。」と深く感激しました。そして、埼玉県の公務員の職を捨てて挑戦する決断をしました。

桐が丘での教員生活が始まって、1か月がたちました。今までとは全く異なる環境の中で接すること全てのことが、新鮮で感動の連続です。また、慣れない私に、同僚となった先生方が温かく声をかけてくれ、自立活動をはじめ、筑波大学の附属学校ならではの、いろいろな事柄を精力的に吸収しているところです。今、私は、「人生を賭けた決断をして、本当に運が良かった。」と、この幸運に感謝しています。そして、本当に幸せです。

早く歴史と伝統ある桐が丘特別支援学校の水に慣れ、力のある教師になれるように全力で頑張ります。